浅科村文化財調査報告　第５集

矢嶋城跡

―― 主郭部の試掘調査 ――

1991

浅科村教育委員会

第１トレンチ全景（南から）

例　　言

1．本書は、矢嶋城の城郭の構造的理解のために、今後行われる主郭部分の面的調査に先だって実施したトレンチ法による試掘調査の概要報告書である。その性質上、調査結果の網羅的な報告ではなく、図版を主体にしたものにした。データの詳細は主郭の全面発掘終了後に合わせて報告するものとする。

2．本調査は、浅科村教育委員会が発掘調査団を組織し実施した。

3．遺構、遺物写真は北原郁生が撮影した。

4．遺物の洗浄・注記は、國學院大學歴史考古学会が行った。
　遺物の復元・実測及び図版作成は、小宮山克己が行った。

5．本書の執筆は、調査員と事務局で分担、上代が校閲し、執筆者名は文末に記した。

6．出土遺物及び諸記録は、浅科村教育委員会が保管している。

7．本書の編集は、上代純一指導の下、小宮山克己、浅科村教育委員会が行った。

矢嶋城跡発掘調査団組織

調査団長　柳澤　哲郎（浅科村教育委員会教育長）平成３年４月から

前調査団長　橋場　安國（前教育委員会教育長）

調査主任　上代　純一（國學院大學歴史考古学会部長）

調　査　員　小宮山克己（國學院大學歴史考古学会ＯＢ）
　　岡田　　裕（國學院大學歴史考古学会会長）

調査補助員　木村英俊・浅香範重・小山浩美・高橋時恵・山内敏治・石浜達之・渡辺暢宏・今枝昭雄（國學院大學歴史考古学会）、岡田　純、岡田　良（望月町）

調査協力者　高林　重水（岡谷市役所職員）
　　國學院大學職員：古山悟由・近藤志乃
　　金井　靖（金井重機代表）
　　松田健一（財団法人信州農村開発史研究所事務局員）

調査事務局　浅科村教育委員会
　　前教育委員会（昭和63年度調査当時）：竹内不二夫・小平勝幸・高野庄次郎・大森秀男・町田文江
　　現在：土屋一郎・佐藤訓子・町田豊秋・小泉龍人・篠原千恵子・北原郁生

本 文 目 次

例　言
第１章　発掘調査の経過……1
　第１節　発掘調査に至る経過……1
　第２節　調査の構成……1
第２章　調査の概要……5
　第１節　トレンチの概要……5
　第２節　検出された遺構と遺物……7
第３章　総　　括……14

挿図・表目次

第１図　トレンチ位置図……2
第２図　矢嶋城跡平面図……3・4
第３図　トレンチ内深掘土層断面図……6
第４図　トレンチ内遺構平面図及び遺物分布図……8
第５図　出土遺物実測図(1)……10
第６図　出土遺物実測図(2)……12

第１表　出土遺物観察表……9

図 版 目 次

巻　頭　第１トレンチ全景（南から）
図版１　第２－Ｂ・第３－Ｂトレンチ（南から）、第４トレンチ（南から）
図版２　第１トレンチ南側深掘土層断面、第１トレンチ北側深掘土層断面
図版３　作業風景（第４トレンチ）、柱穴痕検出状況（第３－Ｂトレンチ内）
　　第１トレンチ遺物出土状況、第３トレンチ遺構検出状況
図版４　第１トレンチ内遺物出土状況（土鍋など）、第１トレンチ内遺物出土状況（土師質土器）
図版５　出土遺物（土師質土器皿、土鍋、陶磁器、石製品）

第１章　発掘調査の経過

第１節　発掘調査に至る経過

今回の発掘調査は主郭部分の状態を確認するための予備調査的性格を持った学術発掘である。城郭の構造から、主郭外周にはかつて土塁が存在していたものと思われるが、その基部の確認および主郭内の遺構・遺物の状態を把握することを主な目的とした。それと合わせて第１次調査の際に主郭北側で検出された空掘がその南側まで巡っているかを確認する調査も行った。

調査はトレンチ方式により行った。

第２節　調査の構成

1）遺 跡 名　矢嶋城跡

2）所 在 地　長野県佐久郡浅科村大字矢島字城平635番、字中屋敷553－１番地

3）調査原因　主郭内の面的調査に先行する試掘確認調査

4）調査主体　浅科村教育委員会及び矢嶋城跡発掘調査団

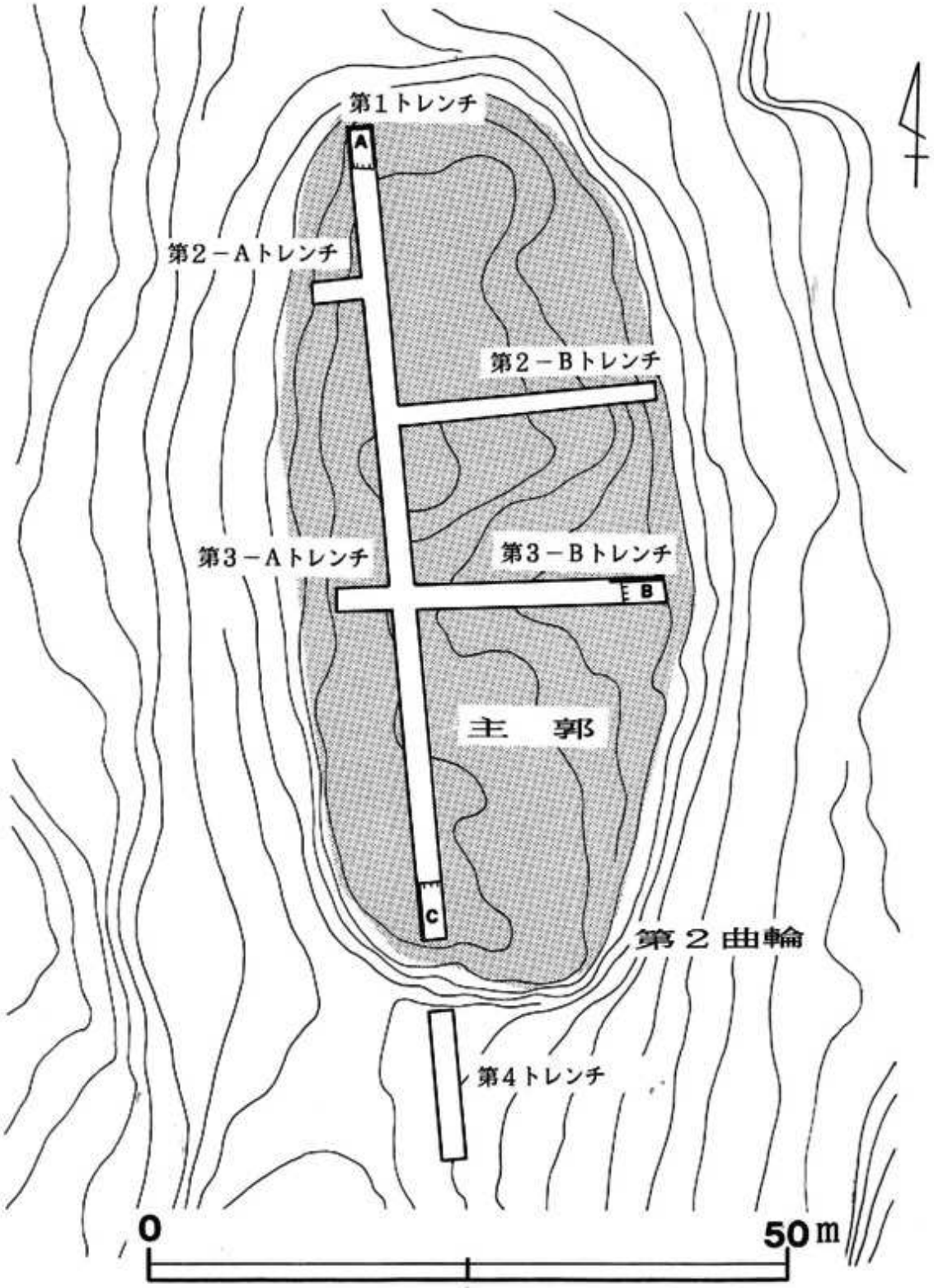
5）調査期間　発掘期間　昭和63年７月21日～８月10日

　　整理作業　平成元年７月～８月、平成２年12月～平成３年３月

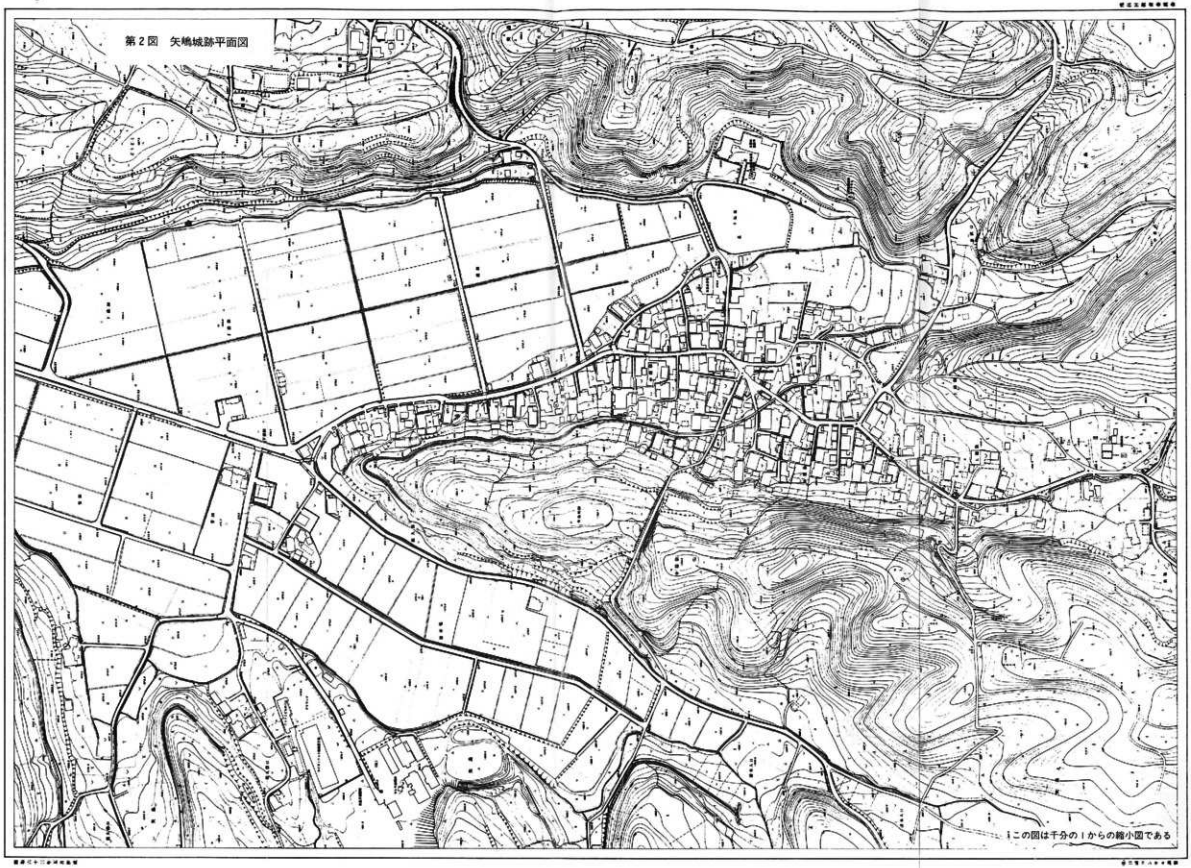
6）調査面積　約240m²

7）調査方法　幅２mのトレンチを主郭内に東西、南北４本、主郭南側第２曲輪に１本を設定し、土層観察、遺構確認を行った。　（調査事務局）

作業風景スナップ



第１図　トレンチ位置図（S＝１：500）



第2図　矢嶋城跡平面図

第２章　調査の概要

第１節　トレンチの概要

今回の調査は、主郭部分の面的調査に先駆けて、トレンチ法による発掘調査を行った。

主郭内の南北方向に２ｍ×64m（第１トレンチ）、東西方向に1.5m×４ｍ（第２－Ａトレンチ）、1.5m×20m（第２－Ｂトレンチ）、２ｍ×26m（第３トレンチ、第１トレンチを挟んで西側をＡ、東側をＢ）の計４本のトレンチを設定し、堆積土層の確認及び遺構・遺物の検出作業を行った。（第２トレンチ位置図参照。）

第１トレンチの北・南端、第３トレンチ東端は深掘し、土塁基部の断面観察を行った。

主郭内を覆う堆積土の状態は、後世の開墾などによりかなりの部分がカク乱されていたが、地山を成す岩盤（砂岩層）上面では遺構確認が可能であった。

第１トレンチ北側の試掘坑では、断面に拳大の礫を含む層が認められたが、この層は人為層と思われ、主郭周縁に築かれた土塁の基底部と考えて良いと思われる。また、第３トレンチでは、建築遺構の存在をしめす柱穴痕を多数検出した。

出土遺物は、第１トレンチを中心に城に伴うと思われる多くの中世遺物が出土した。出土状態は必ずしも原位置とは考え難いが、地山より15～20㎝程浮いた状態で出土する傾向が看取され、城が使われていた当時の生活面をこのレベルに想定することもできよう。

今回の出土遺物は、前回までの調査に比べて質・量ともに豊富であった。

土師質土器皿（かわらけ）は、粘土紐ロクロ成形の技法を示すものが多く、法量・形態に幾つかの種類が見られた。また、煤（油煤）の付着したものもみえられ灯明皿として使用されたものも存在したことを示している。

当時の煮沸土器として知られる土鍋は、今回その全形を知るに足る口縁部から底部までの破片が出土した。また、口縁部形態の異なるものもみられ、形態差＝時間差として捉えられると考えられ、城の存続年代を考える上で重要な資料といえよう。

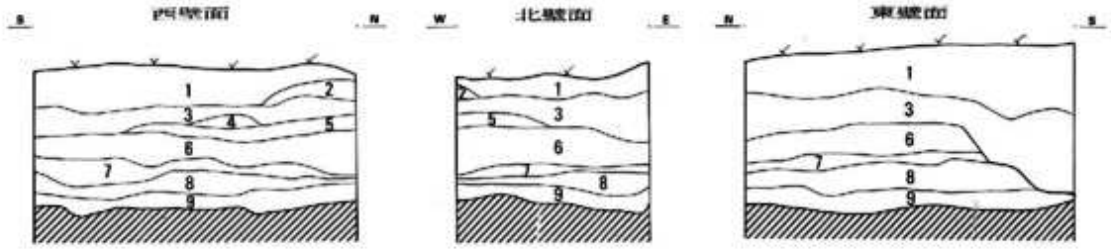
陶磁器類では、前回までの調査でも出土している甕の破片のほか、舶載染付磁器碗（中国、景德鎮窯製）がみられたことは、当時の流通を考える上でも貴重な発見であった。

金属製品では、建物に使用されたと思われる鉄釘、古銭（安南銭を含む渡来銭）、石製品では、石臼、硯の破片が見られた。自然遺物では、加工痕ある鹿角や、獣骨・巻貝が出土した。

主郭部分の調査と平行して、南側の第２曲輪に第１トレンチの延長線上でトレンチを設定し、堀の存在の有無を確認した（第４トレンチ、２ｍ×12m）。地形的にはやや窪んでいたものの堀は存在せず、建築遺構を示す柱穴痕が検出され、土師質土器皿（かわらけ）、土鍋などの破片、鉄釘が出土した。

（小宮山）

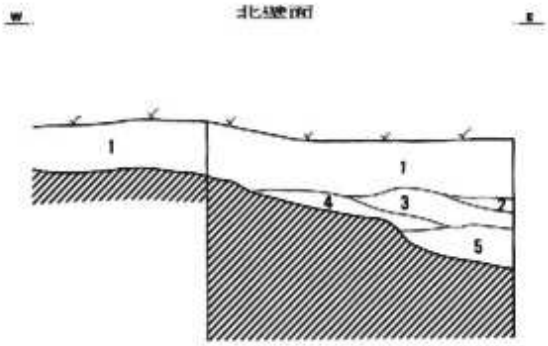
A　第1トレンチ北側深掘



A　第1トレンチ北深掘　土層説明

第1層　褐色土（耕作土）
第2層　赤褐色土（炭化物を僅かに含む。）
第3層　黒色土（炭化物を多量に含む。）
第4層　赤褐色土（拳大の円礫を含む。）
第5層　黒色土（炭化物を焼土粒子含む。）
第6層　黒色土（礫層）
第7層　灰褐色土（堅く締まる。）
第8層　赤褐色土（礫を僅かに含む。）
第9層　暗褐色土（礫を多く含む。）

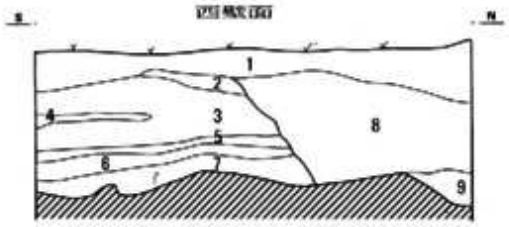
B　第3－Bトレンチ深掘



B　第3－Bトレンチ深掘　土層説明

第1層　褐色土（耕作土）
第2層　暗褐色土（礫を多く含む。）
第3層　明褐色土（小礫を多く含む。）
第4層　暗褐色土（炭化物・焼土粒子を僅かに含む。礫を多く含む。）
第5層　明褐色土（礫を多く含む。締まり良い。）

C　第1トレンチ南側深掘



C　第1トレンチ南深掘　土層説明

第1層　褐色土（耕作土）
第2層　暗褐色土（礫を多く含む。）
第3層　暗褐色土（炭化物・焼土粒子・礫を含む。）
第4層　灰褐色土（礫を多く含む。）
第5層　暗褐色土（礫を多く含む。）
第6層　暗褐色土（小礫を多く含み、締まり良い。）
第7層　黄褐色土（小礫を僅かに含む。）
第8層　明褐色土（炭化物・焼土粒子を僅かに含む。）
第9層　暗褐色土（溝状遺構覆土。炭化物・焼土粒子を僅かに含む。）

0　2 m

第3図　トレンチ内深掘土層断面図（S＝1：40）

第2節　検出された遺構と遺物

第2図のA・B・Cが深掘した部分である。(網目は主郭の範囲)。太線部分の土層断面を第3図に示した（下部の斜線は地山の砂岩層を示す)。

A・第1トレンチ北側部分の東壁面6～9層と3層が成す、南側に傾斜する不連続面が土塁の基部と考えられるものである。対応する西壁面にこの不連続面が見られないのは、主郭周縁に沿って土塁が弧を描いていることによるものと理解してよいであろう。3層に覆われた4層以下が人為層と考えられ、それらは概ね水平堆積を示している。

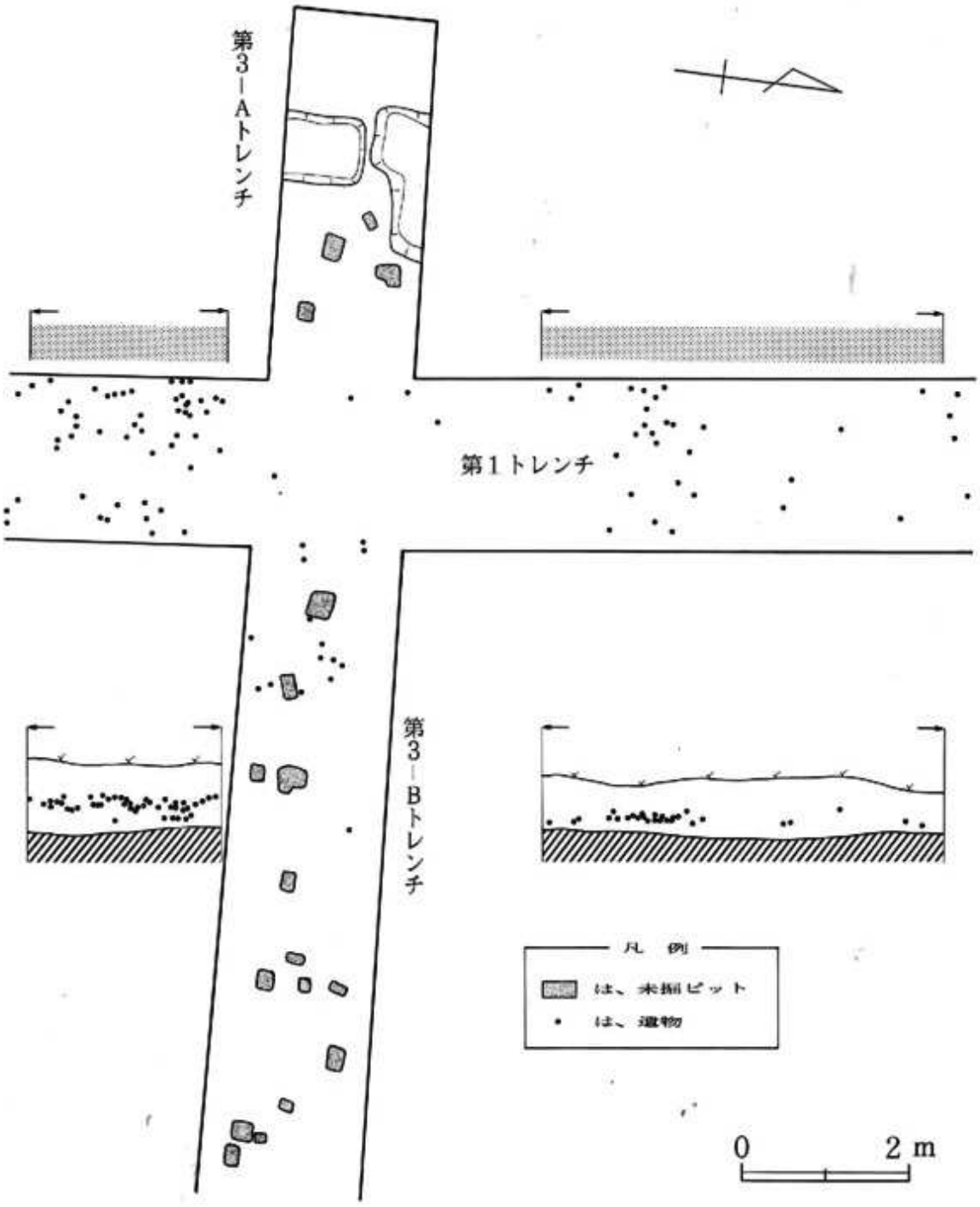
B・第3－Bトレンチでは、地山が外周（東側）へ向かって下降する斜面を成している。2～4層は、この傾斜に沿うように堆積しているが、5層は水平堆積しており、土質の礫混じりで締まっていることから人為的な地業層の可能性がある。Aで見られたような土塁痕跡状の土層は確認されなかったが、位置的に、主郭虎口付近に当たるため、土塁が周囲せずに開口していたものかと考えられる。

C・第1トレンチ南側深掘には、Aで見られたような堆積土層が確認できた。2～7層と8層が成す不連続面は主郭内方に向かって傾斜し、2～7層は水平堆積している。また、断面のみの観察ではあるが、9層は溝状の遺構と考えられるものである。第3次調査で、第2曲輪においても溝状の遺構が検出されているが、地山への掘り込みが浅く不明瞭なものであった。今回確認されたものは、土塁に近接していることから、その付帯する施設の可能性も考慮すべきものかもしれない。

主郭周縁はその内部に比べて地山の検出面が深い傾向にあった。これは、土塁構築に当たって、脆弱な砂岩からなる地山の崩壊・滑落という危険性を考慮して、周縁を削って地業した上に土塁を築くという大規模な土木工事を行った可能性がある。

トレンチの概要でも記したが、第1トレンチと第3トレンチが交差する部分を中心に多くの遺物が出土した。第4図は、第1トレンチと第3トレンチが交差する部分で確認した遺構及び遺物の出土状況（平面分布及び網目部分の垂直分布）である。試掘調査という性格上、確認した遺構のすべてを完掘した訳ではないが、過去の調査で検出されているものと同様の柱穴痕（ピット）が複数見られ、何棟かの掘立柱建物が存在したものと推測される。出土遺物は地山直上面で確認されることなく、当時の生活面を把握する上でもその垂直分布を押さえることが今後の調査でも必要である。また、遺物が出土する同一レベルで、人頭大の円礫が多数見られたが、何らかの遺構に関わるものの可能性もあり、平面的な位置関係を把える必要もある。

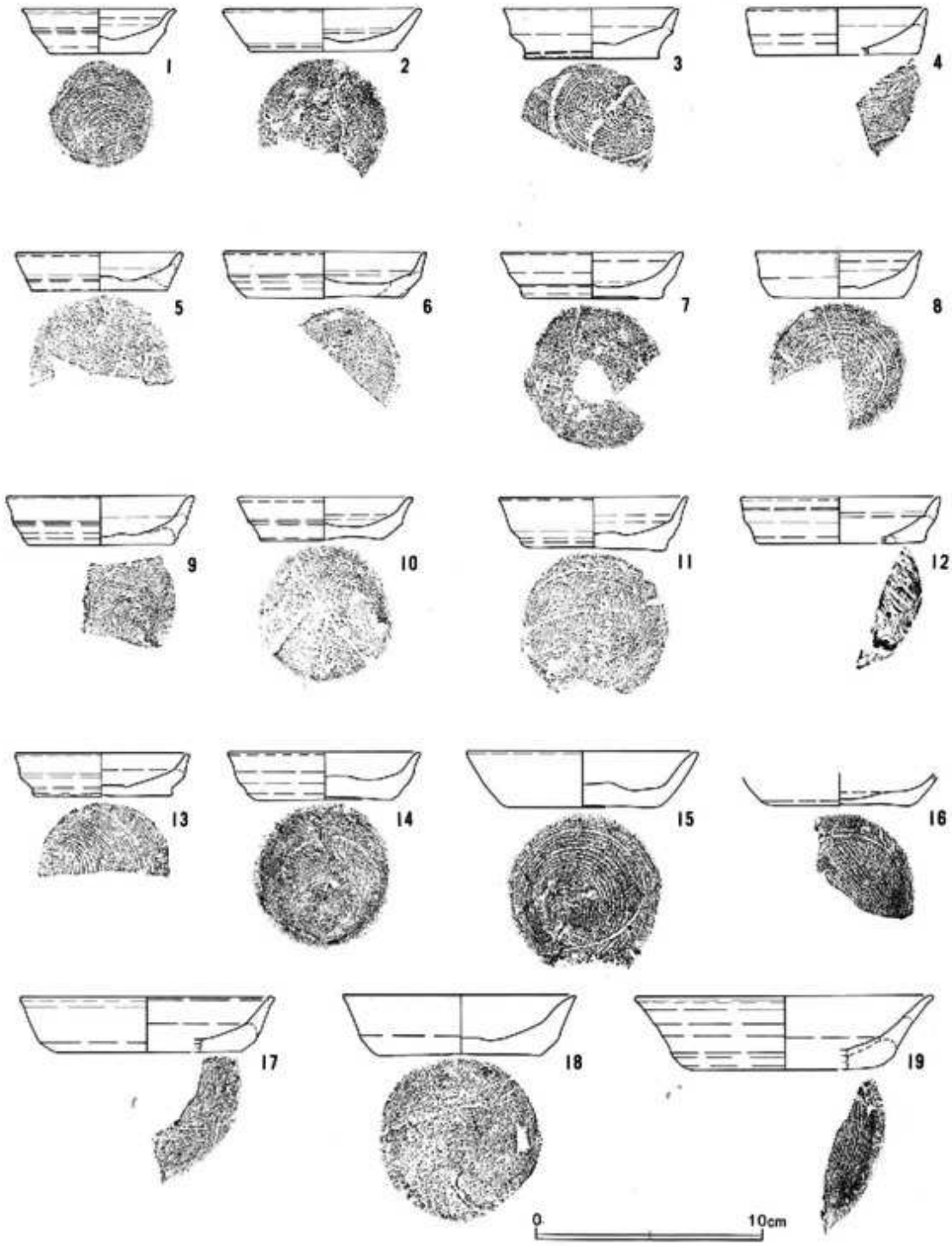
今回の試掘トレンチの状況から推測すれば、主郭内の中央部付近を中心に遺構・遺物が多く存在するものと思われ、今後の調査では建築遺構の主郭内における位置関係及び遺物との相関関係を把えることも必要な課題である。　　（小宮山）



第4図　トレンチ内遺構平面図及び遺物分布図（S＝1：40）

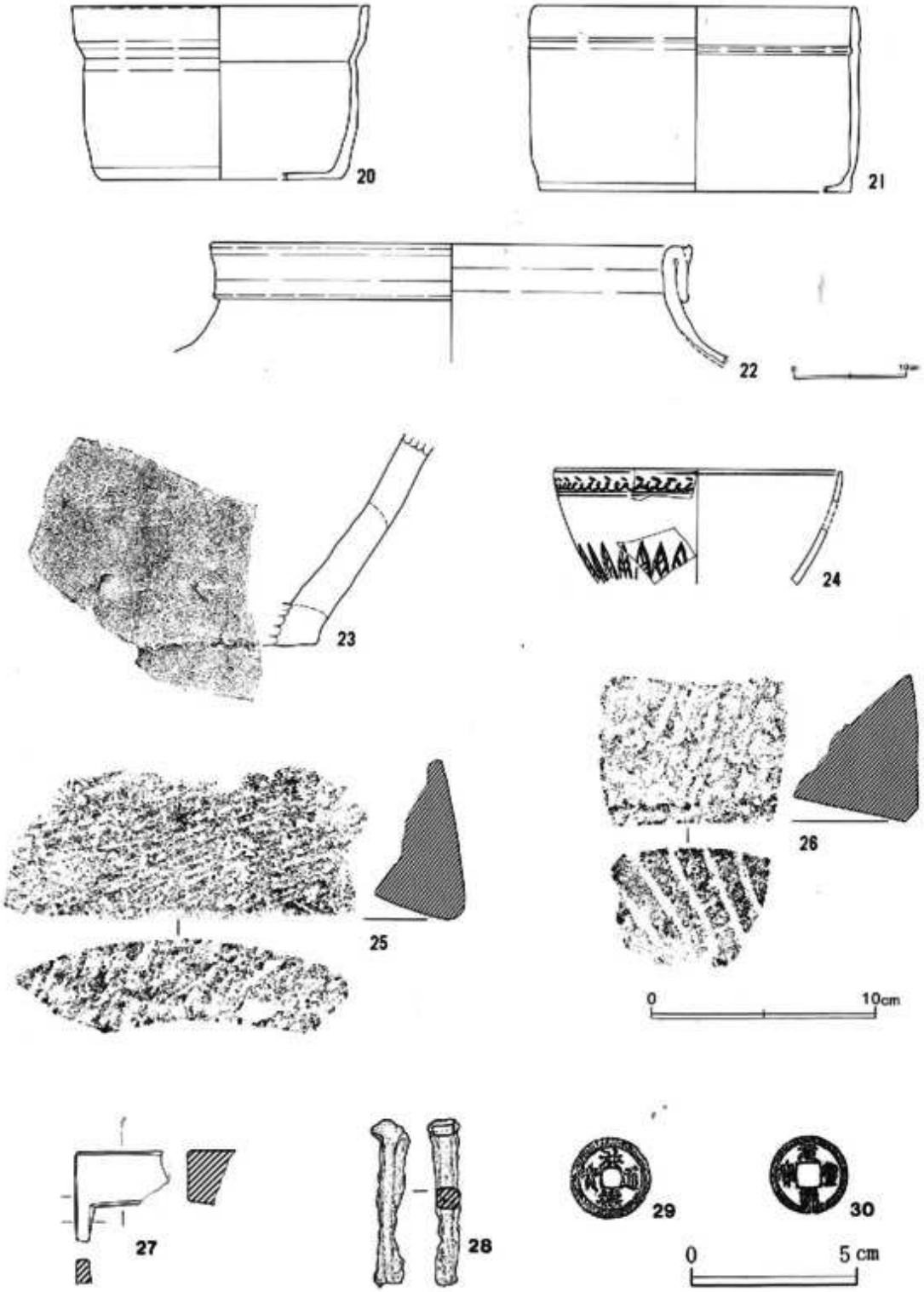
（Ⅰ）土師質土器、陶磁器　　第１表　出土遺物観察表

番号	種類	出土場所	法量(cm)・残存率	胎土・色調・焼成	形態・手法の特徴	備考
1	かわらけ	主郭第１トレンチ	口　径：6.8 器　高：2.0 底　径：4.5 残存率：95%	胎土：石英・長石・輝石 色調：黄褐色 焼成：良好	粘土紐ロクロ成形（右回転）、内底部中央突出、体下半部ロクロ目細かい。底部回転糸切	1TNo.49 実測No.3
2	かわらけ	主郭第１トレンチ	口　径：9.0 器　高：2.0 底　径：6.5 残存率：80%	胎土：石英・長石・赤色鉱物 色調：黄褐色 焼成：良好	粘土紐ロクロ成形、内底部中央突出、体部は直線的に外反する。底部回転糸切	外面はやや摩滅している。 実測No.34
3	かわらけ	主郭第１トレンチ	口　径：7.9 器　高：2.3 底　径：6.0 残存率：60%	胎土：石英・長石などの微砂粒 色調：赤褐色 焼成：極めて良好	粘土紐ロクロ成形（左回転）、体部中程に稜を成し、底部外周突出気味。底部回転糸切	1TNo.115 実測No.29
4	かわらけ	主郭第１トレンチ	口　径：8.1 器　高：2.1 底　径：7.8 残存率：20%	胎土：石英・長石・赤色鉱物 色調：黄褐色 焼成：良好	粘土紐ロクロ成形（右回転）、体下半部ロクロ目細かい。体部は直線的。底部回転糸切	1TNo.55 実測No.4
5	かわらけ	主郭第１トレンチ	口　径：7.6 器　高：1.7 底　径：6.2 残存率：50%	胎土：石英・長石・輝石・赤色鉱物 色調：黄褐色 焼成：良好	粘土紐ロクロ成形（右回転）、体下半部ロクロ目細かい。体部は直線的。底部回転糸切	口唇部に油煤付着 1TNo.55 実測No.4
6	かわらけ	主郭第１トレンチ	口　径：9.0 器　高：2.1 底　径：7.0 残存率：50%	胎土：石英・長石・輝石・1mm程の小石 色調：赤褐色 焼成：極めて良好	粘土紐ロクロ成形（左回転）、体部中程に稜を成し、体下半部ロクロ目細かい。底部回転糸切	器形に歪みあり 1TNo.143・No.144 （接合せず） 実測No.13
7	かわらけ	主郭第１トレンチ	口　径：8.2 器　高：2.1 底　径：6.1 残存率：80%	胎土：石英・長石・輝石・各閃岩 色調：赤褐色 焼成：良好	粘土紐ロクロ成形（左回転）、体部中程に弱い稜を成す。	口唇部に油煤付着 1TNo.120 実測No.16
8	かわらけ	主郭第３ーBトレンチ	口　径：7.5 器　高：2.1 底　径：6.5 残存率：75%	胎土：石英・長石・輝石・赤色鉱物、素地のきめ細かい 色調：黄褐色 焼成：良好	粘土紐ロクロ成形（左回転）、体下半部ロクロ目細かい。底部回転糸切	3BTNo.19 実測No.19
9	かわらけ	主郭第１トレンチ	口　径：8.5 器　高：2.2 底　径：6.5 残存率：30%	胎土：石英・長石・輝石・赤色鉱物 色調：黄褐色 焼成：良好	粘土紐ロクロ成形（左回転）、体下半部ロクロ目細かい。底部回転糸切	1TNo.121 実測No.25



第5図　出土遺物実測図(1)

番号	種 類	出土場所	法量(cm)・残存率	胎土・色調・焼成	形態・手法の特徴	備 考
10	かわらけ	主郭第1トレンチ	口 径：7.9 器 高：2.0 底 径：5.5 残存率：90%	胎土：石英・長石・輝石・赤色鉱物 色調：黄褐色 焼成：良好	粘土紐ロクロ成形（左回転）、体下半部ロクロ目細かい。底部回転糸切	1TNo.139 実測No.10
11	かわらけ	主郭第1トレンチ	口 径：8.5 器 高：2.4 底 径：6.4 残存率：完形	胎土：石英・長石・輝石・赤色鉱物 色調：黄褐色 焼成：良好	粘土紐ロクロ成形（左回転）、腰部が張り、口縁部は直線的に開く。底部回転糸切	口唇部に油煤付着 1TNo.154 実測No.15
12	かわらけ	主郭第3一Bトレンチ	口 径：9.0 器 高：2.1 底 径：7.5 残存率：20%	胎土：石英・長石・輝石・赤色鉱物 色調：暗黄褐色 焼成：良好	粘土紐ロクロ成形（左回転）、腰部が張る。体下半部ロクロ目細かい。底部回転糸切	3BTNo.7 実測No.17
13	かわらけ	主郭第1トレンチ	口 径：7.9 器 高：1.9 底 径：6.0 残存率：50%	胎土：石英・長石・赤色鉱物 色調：暗黄褐色 焼成：良好	粘土紐ロクロ成形（左回転）、体下半部ロクロ目細かい。体部中程に稜を成し、底部外周突出気味。底部回転糸切	1TNo.48 実測No.1
14	かわらけ	主郭第1トレンチ	口 径：8.6 器 高：2.2 底 径：6.0 残存率：40%（底部は100%）	胎土：石英・長石・輝石・赤色鉱物、砂質気味 色調：黄褐色 焼成：良好	粘土紐ロクロ成形（左回転）、体下半部ロクロ目細かい。体部は全体に丸味を帯びて立ち上がる。底部回転糸切	1TNo.110 実測No.28
15	かわらけ	主郭第1トレンチ	口 径：10.5 器 高：2.5 底 径：6.8 残存率：30%（底部は100%）	胎土：石英・長石・輝石・赤色鉱物、砂質気味 色調：外面赤褐色 内面黄褐色 焼成：良好	粘土紐ロクロ成形（左回転）、器面は平滑、内底部中央が盛り上がる。底部回転糸切	1TNo.153 実測No.20
16	かわらけ	主郭第3一Bトレンチ	底 径：6.2 残存率：30%	胎土：石英・長石・輝石・赤色鉱物などの微粒子 色調：外面灰白色 焼成：良好	粘土紐ロクロ成形（右回転）、内底部中央指ナデ調整、外面部板目痕、底部回転糸切	内面に2次焼成痕、外面に赤色顔料付着 3BTNo.14 実測No.33
17	かわらけ	主郭第1トレンチ	口 径：11.5 器 高：2.5 底 径：8.3 残存率：20%	胎土：石英・長石・輝石・赤色鉱物 色調：暗黄褐色 焼成：良好	粘土紐ロクロ成形（右回転）、体下半部丸味を帯びる。口唇部は平坦面を成す。底部回転糸切	1TNo.142 実測No.11



第6図　出土遺物実測図(2)

番号	種類	出土場所	法量(cm)・残存率	胎土・色調・焼成	形態・手法の特徴	備考
18	かわらけ	第2曲輪第4トレンチ	口径：10.6 器高：2.5 底径：7.5 残存率：90%	胎土：石英・長石・輝石・赤色鉱物 色調：暗黄褐色 焼成：良好	粘土紐ロクロ成形（左回転）、体下半部丸味を帯びる。底部回転糸切	内外面に油煤付着 4TNo.27 実測No.36
19	かわらけ	主郭第1トレンチ	口径：13.5 器高：3.3 底径：8.4 残存率：25%	胎土：石英・長石・輝石・角閃岩・赤色鉱物 色調：暗黄褐色 焼成：良好	粘土紐ロクロ成形（左回転）、体下半部ロクロ目細かい。底部から丸味を帯びて立ち上がり、直線的に開く。底部回転糸切	1TNo.145 実測No.12
20	土鍋	主郭第1トレンチ	口径：27.1 器高：15.6 底径：22.0 残存率：25%	胎土：石英・長石・輝石・赤色鉱物などの微砂粒 色調：外面黒褐色 内面暗赤褐色 焼成：良好	粘土紐成形ロクロ調整口縁は丸味を帯びて立ち上がる。底部砂底	外面煤付着 1TNo.60～63・68・81・82 実測No.38
21	土鍋	主郭第1トレンチ	口径：29.6 器高：16.0 底径：28.5 残存率：20%	胎土：石英・長石・輝石・赤色鉱物などの微砂粒 色調：外面黒褐色 内面黄赤褐色 焼成：良好	粘土紐成形ロクロ調整体部は直線的に立ち上がる。頸部外面わずかにくぼみが巡り、内面には沈線が巡る。底部砂底	外面煤付着 1TNo.135 実測No.39
22	大甕	主郭第1トレンチ	口径：44.2（以上推定） 残存率：5%	胎土：石英・長石など 色調：暗赤褐色 焼成：良好	ヨリコ作り、口縁部の縁帯「N」字状	1TNo.22・32・130 実測No.40
23	大甕	主郭第1トレンチ	底部破片	胎土：石英・長石など 色調：暗赤褐色 焼成：良好	ヨリコ作り、外底部板目圧痕。	1TNo.12・16 実測No.22
24	磁器（染付磁器碗）	主郭第3—Bトレンチ	口径：13.2（以上推定） 細片資料による復元実測	胎土：磁胎 釉薬：淡青色	口縁部には区画内に列点及び波頭状、内部には蓮弁状の文様が描かれる。中国景徳鎮窯産	3BTNo.11 実測No.41

（2）石製品、金属製品

25、26は挽臼の破片である。共に第1トレンチ出土。27は硯の破片である。縦長長方形を呈するものと思われる。暗茶褐色の堆積岩（粘板岩？）製。第1トレンチ出土。28は鉄釘である。断面角柱形を呈し、頭部を折り曲げている。第1トレンチ出土。29、30は渡来銭である。29は洪徳通寶（対読）で、初鋳年1023年の安南（ベトナム）銭である。30は元豊通寶（回読、篆書体）で、初鋳年1078年の南宋（中国）銭である。共に第1トレンチ出土。（小宮山）

第3章　総　　括

矢嶋城は、相浜層から成る丘陵に立地し、その砂岩層および泥岩を削平して築城している。その地盤の脆さから、自然崩壊が進行している状況にあり、現状を維持することが困難であることなどから、昭和59年より浅科村教育委員会が発掘調査団を組織して、継続的に学術発掘を進めている。今回の調査は、主郭の面的調査に先駆けて、その状態を確認するために行った試掘調査で、矢嶋城の発掘調査としては、第4回目の調査である。

過去の調査では、第1次調査は第2～3曲輪にトレンチ調査を行い、第2次調査では第5曲輪が五郎兵衛用水跡であることが判明し、第3次調査では第2曲輪の面的調査で竪穴状遺構・掘立柱による建築遺構が検出されている。今回の調査で初めて城の中心的部分である主郭内の状態を調査したわけである。調査の経過から、①舌状台地に占地する城郭としては珍しい輪郭式であり、②戦争に使用されること無く廃城になったと考えられ、③平時は麓に生活し戦時には城に立て籠もる根小屋式城郭と思われる。というのが、現在までの矢嶋城に関する所見である。

今回の調査の成果は第2章で述べたが、遺構に関しては、土塁の存在が断面観察により確認され、踏査の結果虎口と推定された主郭東側部分には、土塁が開口しているらしい事が判明した。土塁上部の土は流失しているが基部は面的に確認することが可能と思われる。また、複数棟の掘立建物の存在を示す柱穴が見られたが、築城当時の城郭としての形態を維持しつつも、内部に於ける建物の建替えが行われたものと考えられよう。これに対応して出土遺物にも時間的幅を伺わせるものが多く出土した。過去の調査ではほとんど遺物が出土していない事とは対称的であり、恒常的にかなりの期間機能していたと考えられる。年代的には15世紀代を中心とし、今回出土した常滑系の甕から16世紀半ば頃には廃城になり、戦国時代を通じて戦時に使用されること無く今日に至ったものと考えて良いと思われる。面的調査に際しては、多くの中世遺物が出土することが予想され、この地域の中世遺物研究に格好の資料を提供してくれる事が期待される。

最後に今度の調査の計画だが、主郭部分の面的調査を、期間や予算の関係から南北に二分割して進める。北側半分は土塁の残存状況が良好と思われ、面的に確認することが一つの課題である。南側半分では、虎口の形態が確認されるものと思われる。また、今回の第4トレンチに於いて掘跡が検出されず建築遺構が確認されたが、これらの様相を明らかにするとともに主郭北側の空掘の全掘も行う必要がある。矢嶋城の縄張り範囲は、現在の道路として利用されている掘切道よりも南側に及ぶことは数次に亘って行った踏査によって明らかであり、調査の範囲をしだいに南側へと広げていく必要があり、それによって矢嶋城の縄張りが明確になるのである。

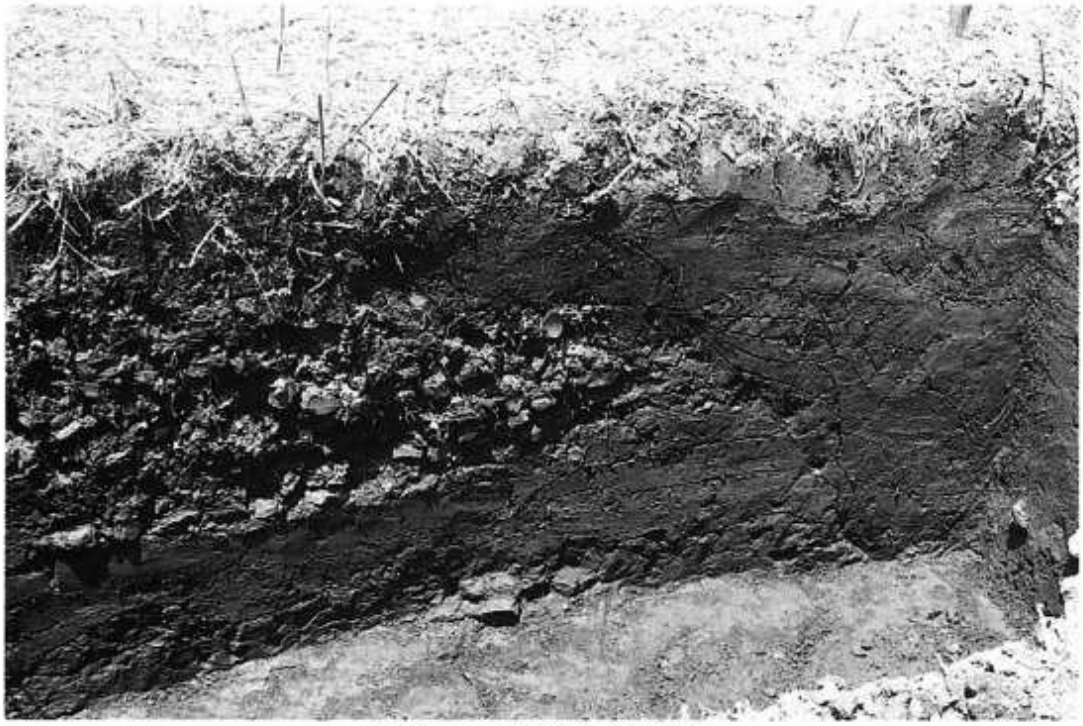
矢嶋城は中世に於けるこの地域の武士団の拠点であり、今後の調査で文献史料の稀薄な時代の、地域の歴史が明らかになるものと思われる。また、発掘調査の成果や出土品が地域史研究や学習教材として積極的に活用されることも調査を継続的に進めて行く上で有意味な事である。

（上代・小宮山）

第2-B(奥)・第3-B(手前)トレンチ(南から)

第4トレンチ(南から)

図版　2



第１トレンチ南側深掘り土層断面

第１トレンチ北側深掘り土層断面

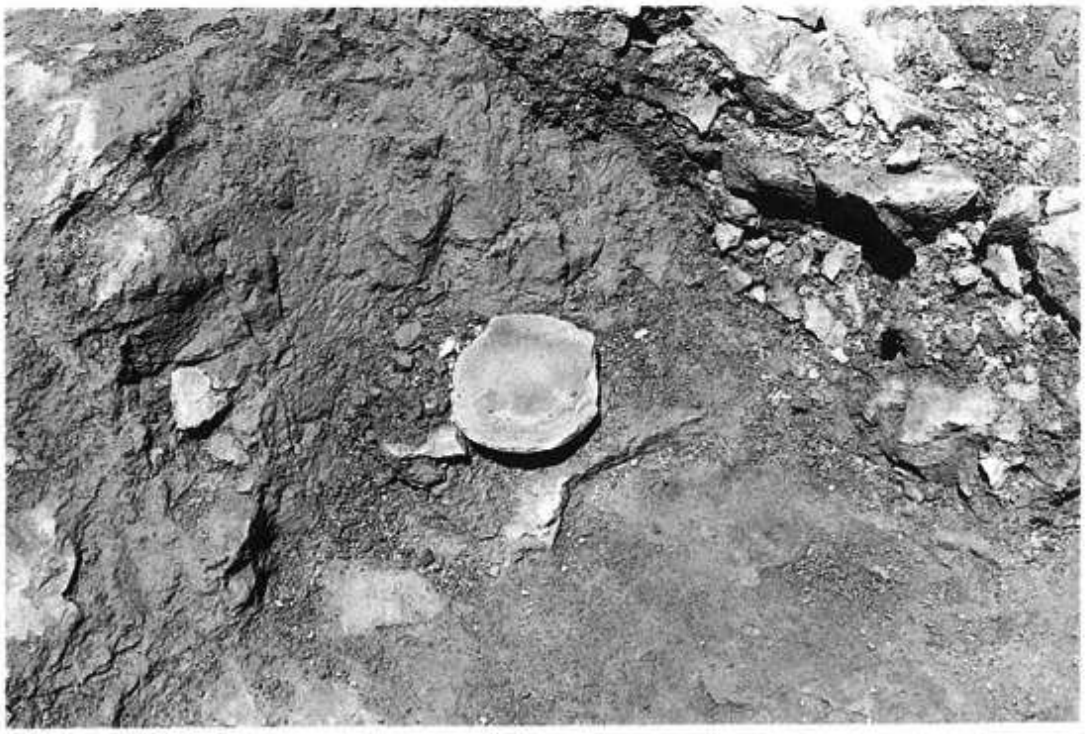
作業風景(第４トレンチ)

柱穴痕検出状況(第３－Ｂトレンチ内)

第１トレンチ遺物出土状況

第３トレンチ遺構検出状況

第１トレンチ内遺物検出状況（土鍋など）



第１トレンチ内遺物出土状況（土師質土器皿）

1　土師質土器皿(かわらけ)

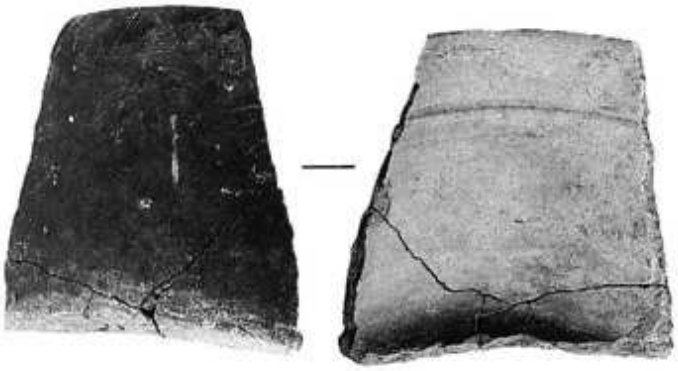
第5図3

第5図11

第5図1

2　土　鍋

第6図20



第6図21

3　陶磁器

第6図22
(常滑窯系甕)

第6図24
(景徳鎮窯系染付碗)

4　石製品

第6図25
(石　白)

出土遺物(土師質土器皿、土鍋、陶磁器、石製品)

浅科村文化財調査報告書

第1集　『土合1号噴の調査』（1969年）

第2集　『矢嶋城跡』緊急発掘調査報告書（1985年）

第3集　『五郎兵衛用水』矢嶋城跡腰曲輪部に開鑿した用水路の調査（1987年）

第4集　『矢嶋城跡』第2曲輪部の建築遺構（1988年）

第5集　『矢嶋城跡』主郭部の試掘調査（1991年）

浅科村文化財調査報告　第5集

矢嶋城跡

――主郭部の試掘調査――

発　行　1991年7月30日
発行者　浅科村教育委員会
印　刷　ほおずき書籍株式会社